KAPPA NOVELS

長編推理小説　書下ろし

殺人方程式

——切断された死体の問題——

綾辻行人（あやつじゆきと）

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(〒112-11)
光文社出版局

長編推理小説　殺人方程式

1989年5月30日　初版1刷発行
1993年6月20日　12刷発行

著者　綾辻行人
発行者　大坪昌夫
印刷者　佐々木明
東京都文京区後楽2-18-8
公和図書

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京(3942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613
© Yukito Ayatsuzi/Kitty Music Corporation 1989
ISBN4-334-02813-6
Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

下ろし

殺人方程式

—切断された死体の問題—

綾辻行人

KOBUNSHA

カッパ・ノベルス

『殺人方程式』　目次

プロローグ（1）――ある犯罪の光景――　5

プロローグ（2）――新聞記事――　7

プロローグ（3）――犯罪計画――　9

Ⅰ　事件を演出する七つの場面　12

明日香井叶（あすかいきょう）のノートより(1)　45

Ⅱ　刑事たちによる事件の捜査　46

明日香井叶のノートより(2)　107

Ⅲ　明日香井家における事件の再検討　109

明日香井叶のノートより(3)　138

Ⅳ　偽刑事たちによる事件の再捜査　143

明日香井叶のノートより(4)　187

Ⅴ　明日香井家における事件の「不可能性」の検討　189

明日香井叶のノートより(5)　215

Ⅵ　罠、そして事件の終局　217

エピローグ（1）――電話――　251

エピローグ（2）――回想――　255

あとがき ……　260

解　説 …… 鮎川哲也（あゆかわてつや）　263

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

――親愛なるOに――

プロローグ(1)
――ある犯罪の光景――

六月十二日(日) 3:00 a.m.

昨夕から降り続いてやまぬ小雨。濡れそぼった深夜の街――。

閑静な住宅街――その外れに建つ家の一階。明かりの点いた部屋の窓。じっとりと重く湿気を含んだ闇に身を潜め……。

……広い洋間の光景。

男と女が、差し向かいで話をしている。いや、話をしている、といった雰囲気ではない。何やらひどく険悪なムードだ。

男が立ち上がり、女に近づいていく。しゃがれた声が、ボソボソとその口から発せられる。女の方は白い寝間着姿である。茶色い革張りの寝椅子に腰かけて、冷然と相手の顔を見つめている。

男の表情は、醜くひきつっている。てらてらと脂ぎった額。たるんだ頬と顎の肉をひくつかせ、分厚い唇をしきりに舌で湿らせながら、じりじりと、女の方へ太った身体を進めていく。

――と。

充分に間を詰めおえた男が、いきなり女に飛びかかった。女は――男がそういった行動に出ることを予期していなかったようだ――短い悲鳴を上げた。

微かに、窓のガラスが震えた。

女の華奢な身を押し倒し、男が馬乗りになる。長い黒髪が、寝椅子の上に乱れ広がる。大きく開いた口を片手で押えつけながら、男は上着のポケットから黒いネクタイを取り出し、女の細い首に巻きつける。そして……。

喉に喰い込んだネクタイ。白目を剝き、舌を垂ら

した女の形相(ぎょうそう)――。
ずんぐりとした肩を激しく上下させながら、男は、動かなくなった女の身体から離れた。蒼(あお)ざめた顔で、キョロキョロと部屋の中を見まわす。
やがて、大きく一つ息をつくと、男は気ぜわしげに次の行動を起こした。……
……
……
……
……とにかく眠ろう、と思った。
とにかく眠ってしまおう。
眠って、明日になれば、これから自分がどうしたらいいのか、その答えが見つかるかもしれない。

プロローグ(2)
――新聞記事――

六月十三日（月）　朝刊

『ＪＲ横浜線で中年女性、飛び込み自殺』

十二日午前五時頃、東京都Ｍ市＊＊町、ＪＲ横浜線の境川鉄橋付近で、始発の下り普通列車が女性を轢き殺すという事故が起こった。

境川は、Ｍ市と神奈川県Ｓ市との境界を流れる川で、事故が起こったのはＭ市側。踏切から約五メートル離れた、鉄橋のすぐ手前だった。運転士の話によれば、女性は最初から線路上にうつぶせに倒れていたとのこと。すぐにブレーキをかけたが、とても間に合わなかったという。

Ｍ署では、飛び込み自殺として現場の検証および遺体の回収にあたったが、遺体は轢断された上、列車の車輪に巻き込まれて川に飛び散っており、作業は難航している。

自殺者の身元はいまだに不明。発見された遺体の各部より、四十歳前後の中年女性、としか分かっていない。……

六月十四日（火）　朝刊

『ＪＲ横浜線の飛び込み自殺
遺体は新興宗教団体の女性教主』

十二日早朝に起こった、ＪＲ横浜線境川鉄橋手前での飛び込み自殺の遺体は、神奈川県Ｓ市＊＊町の貴伝名光子さん（四四）のものであることが判明し

た。

光子さんは、S市を中心に布教活動を行なっている宗教法人「御玉神照命会」の教主で、十一日夜に同会の本部を辞したあと、姿を消していたらしい。十三日午後、妻の不在を不審に思った夫の貴伝名剛三さん（五〇）からの通報で、前日の飛び込み死体が光子さんであると分かった。

なお、遺書の類が発見されておらず、自殺の動機が不明なこと、遺体の状態に不審な点が見られることなどから、M署では、他殺の疑いもあるとして引き続き捜査を進める方針である。……

プロローグ(3)
――犯罪計画――

八月某日

二種類の刃物が必要だ。

一つは、大ぶりの肉切り包丁がいいだろう。もう一つは、なるべくコンパクトに折りたたみのきく鋸。この両方が必要だ。

包丁だけだと骨を断つのが大変だし、鋸だけだと肉が刃に絡まって往生する。包丁でまず筋肉と脂肪を切り、それから鋸で骨を切断する。これが最も効率的な方法だろう。

手袋が要る。もちろん、指紋を残さないためだ。巷に氾濫する推理小説や刑事ドラマで、これだけ「指紋」の概念が常識化してしまった今でもなお、現場に指紋を残していく犯罪者がいるというのは、全く不思議なことだと思う。

それから、ロープ。なるべく細くて軽く、しかも丈夫なものでなければならない。

それから――。

大きな袋が必要だ。ちょうどいいものを探さなければならない。できれば水を通さないもの。ゴミ用のポリ袋ではちょっと小さすぎるし、弱すぎる。もっと大きな、頑丈な袋が必要だ。例えば、そう、登山用の寝袋などはどうだろうか……。

それから――。

ロープとは別に、細くて丈夫な紐が要る。これは、太めの釣り糸を使えばいい。

この糸の先を結びつけるボール。穴をあけて通せるようなものがいい。テニスの硬球あたりが適当だろう。

それから――。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

最後のこれは、もしかすると少々難物だ。市販のもので恐らく可能だと思うが、うまく使えるように手を加えなければならないかもしれない。強度の確認を事前にしておく必要もある。が、まあ何とかなるだろう。いや、何とかせねばならない――。

以上のものを、後に捜査の手が及んでも決して足がつかないよう、細心の注意を払って集めること。焦って、不用意な買い物をするようなことさえなければ、大丈夫だ。大丈夫だ。……

……

……

――どうしてだろう？

どうして自分は、こんな方法でこの犯罪を行なおうとしているのだろうか。

ある側面から見れば、これは非常に優れた方法だ。けれども、その反面、至極危険でもあるし、馬鹿げたやり方だとも云える。

あの男に対する殺意は――これは、決して揺るぎのない意志として存在する。いかなる手段を使ってでも、あの男を殺してやりたいと思う。今それをしなければ、きっとこの先、死ぬほど後悔することだろう。

しかし――、他にもっと簡単な方法があるのではないか？

選択肢は無数にあったはずだ。そこから、状況に最も適合する方法としてこの計画を案出したはずなのだが――、もしかしたら自分は、知らず知らずのうちに、思考の袋小路に踏み込んでしまっているのかもしれない。目的と手段、手段と目的の――転倒？　循環？……

いや、今さら考えまい。

たとえそうであろうと、もう構わないではないか。この状況下、この条件下で、こういった計画を思いついてしまったこと、その偶然の交差自体が一つの運命だったのだ。偶然、運命――神の、いや、悪魔の、あまりにも見事な配剤……。

――そうだ。

そう……。

……

……

I　事件を演出する七つの場面

1　時・八月十五日（月）　10：30 p.m.
所・「御玉神照命会」本部ビル
　　ペントハウス

「悪いが、今夜はもう帰ってもらう」
バスルームへ向かいかけたところで、そう云われた。
「――え？」
驚いて、美耶は振り向いた。
「帰れって……」
少し首を傾げて、男を見返す。男は裸のまま、ベッドの傍らのアームチェアにずっしりと腰を沈め、煙草をふかしている。ナイトスタンドの光の陰になって、顔の表情は読みとれなかった。
「今から？」
「云ってなかったかな」
しゃがれた低い声とともに紫煙が立ち昇り、黄色いスタンドの明かりの中で小さく渦を作る。
「今夜は――ちょっと用がある。埋め合わせはいずれするから、すまんが、帰ってくれ」
用がある？　――〝お籠もり〟の最中に、一体どんな用があるというのだろう？
それを尋ねることなど、しかし、美耶にはできるはずもなかった。
男と自分との、現実の距離関係・力関係を、ここで改めて思い知らされる。もとより、普通の愛情で結ばれた仲だとは思っていない。男はベッドで月並みな愛を語るが、結局自分は、彼の愛人の一人でしかないのだ。
軽い憤り。自己嫌悪とやりきれなさ。

くるりと背を向け、逃げるような足どりで部屋を出た。浴室に飛び込むと、全開にしたシャワーの水を頭から浴びる。

（あのスケベ教主！）

わざと、心の中で毒づいてみる。

（誰が、好き好んであんな年寄りなんかと……）

斎東美耶、二十八歳。男――貴伝名剛三とは、父と娘ほども年齢の開きがある。

「御玉神照命会」――ここ、神奈川県S市を本拠地として、この十年余りで急速な成長を遂げた新興宗教団体の「教主」が、貴伝名剛三である。もっとも、彼が「教主」の名を得たのは、つい最近のことだ。それまでも彼は、「会長」という肩書の下に教団の運営における実権を握ってはいたが、会員の尊敬・信奉の対象であり、もって会の最高権力者と認められていたのは、あくまでも前「教主」――剛三の妻、貴伝名光子なのだった。

その光子があんなことになったは、二カ月前、六月中旬のこと――。

S市と隣りのM市との境界に沿って流れる、境川という川に架かったJR線の鉄橋付近で、飛び込み事故があった。死体はバラバラに轢断され、車輪に巻き込まれて川に散らばったという。それが、貴伝名光子だったのである。

『「照命会」女教主、謎の死!?』

週刊誌などでも大きく報道されたあの事件のことを思い出すたび、美耶は複雑な気分になる。

事件は当初、単なる飛び込み自殺と見られた。ところが、捜査が進むにつれ、自殺にしてはおかしな点が次々と出てきた。

最初からその女性は線路の上に横たわっていた、列車が近づいても身動き一つしなかった、という運転士の証言。現場がS市の自宅からかなり離れた場所であるにもかかわらず、彼女の服装が白い絹製の寝間着であったこと。自殺の動機がはっきりしないこと。それから……。

「死体の状態に、ちょっと気懸かりな箇所がありまして、他殺という線も出てきてるんですよ」

事件の数日後、S市で美耶が開いているブティックにやって来た刑事の言葉――。

「十一日の夜から翌日にかけて、貴伝名剛三氏があなたと一緒におられたというのは本当ですか？」

と、美耶は訊かれた。

「いや、一応、これは捜査の手順のようなものなので……。別に、彼を特に疑っているというわけではないんです」

はい、と彼女は答えた。確かにあの夜、貴伝名剛三は自分の部屋に泊まっていった、と。

あの日――土曜日の夜は、パトロンである剛三が美耶のマンションに通ってくる夜だった。いつものように、午後十時には彼はやって来た。そうして翌日の昼頃まで一緒に過ごす。彼の浮気は、妻光子も黙認するところだったらしい。

あの夜、確かに剛三は美耶の部屋に泊まった。ただ――一つ、刑事には云わなかったことがある。夜中の二時頃、一度彼は外へ出ていったのだ。

眠っていた美耶は、玄関のドアが閉まる音でそれに気づいた。剛三は、美耶には告げず、こっそりベッドを抜け出していったのだった。やがて外から聞こえてきた、車のエンジンの音……。

二時間余りの後、剛三は帰ってきた。目を覚ました美耶に対して、彼は、寝つかれないのでドライブに行ってきたのだ、とだけ説明した。

境川の鉄橋で女性の飛び込み自殺があったことは、十二日の午後にテレビのニュースで見た。その時はもちろん、別に気に留めはしなかった。そして翌十三日の昼前、店にかかってきた剛三からの電話で初めて、美耶はその女性が光子であったことを知らされたのだ。

「もしも警察の人間がやって来たら――」

剛三は云った。

「十一日の夜から十二日の昼まで、ずっと一緒にいたと証言するように。間違っても、夜中に私が出ていったことを云ってはいけない」

強い命令口調だった。

自殺だったんでしょ？　と、美耶は訊いた。それ

ともあの夜、まさかあなたが……？
それはない、と、彼は即座に否定した。
「あれは、全くの偶然だ。が、警察はそう受けとってはくれん。連中は何でも疑ってかかる。そんなことで、くだらん容疑をかけられたくはない」
その言葉を、美耶は信じることにした。
剛三が夜中に黙って外出したりするのは、何もそれが初めてのことではなかったし、それに――そう、何よりも、今ここで彼というパトロンを失うことを恐れたのだった。これといった取り柄もなく、さして美人でもない自分が、大した苦労もなしに贅沢な暮らしを送っていられるのは、彼の存在があってこそのこと――と、その程度の計算高さは、美耶にもあった。
（本当のところは、一体どうなんだろう？）
冷たいシャワーで身体のほてりを鎮めながら、想いを巡らしてみる。
（彼女は自殺したの？　それともやっぱり、誰かに殺されて……？）
事件の捜査は、その後どういう方向で進められているのだろうか。あれ以来、刑事たちが訪ねてくることもないが……。
（彼が奥さんを殺した？）
（――まさか……）
光子が死に、剛三は教主の座についた。「会長」と「教主」とが、照命会という組織においてどれほどの差異があるものなのか、部外者である美耶にはよく分からない。けれども、剛三と光子の夫婦仲がすでに冷えきっていたこと、剛三が、美耶をはじめとして外に何人かの愛人を囲っていることなどを考えると……。
濡れた髪を掻き上げ、ブルブルと頭を振る。
（考えない考えない……）
壁、床、浴槽、すべて大理石で作られた、広いバスルーム。先ほどの寝室、リビング、書斎……どれもが、ゆったりとした贅沢な造りの部屋である。
先週の月曜日、初めてここへ呼びつけられた時には驚いた。教団ビルの「神殿」で〝お籠もり〟の最

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com